

バーバラちゃんギリギリセーフ！

モンロー

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

原神でおしっこ一発モノ。各方面にごめんなさい。  
前後編に別れます。

後編 前編

目次

11 1

## 前編

テイワツト大陸は璃月の西。

天を衝き聳え立つ山々と清らかな川の流れ、岩肌力強くも根を張る木々が織りなす雄大な自然が、見渡す限りに広がっている。

その中で、岩壁に張り付いて上へ上へと登る四人と一匹の姿だけが、幻想的な風景画に付いた塵埃のような異物感を浮かばせていた。

「はあっ、はあっ……」

額から流れ、頬を伝う汗。

頭上を見上げ、手頃な場所にある出っ張りを掴んで身体を引き上げることの繰り返し。

手を離してしまえば奈落へと消えてしまうような絶壁で、最早引き返すこともままならない高さに居る彼等は、息を切らせながらもその腕を止めずに登り詰めていた。

「山頂までっ、あとどのくらいなのっ……?」

吹き荒ぶ風の中、四人の内の一入であるまだ年若い少女が、その淡いブロンドのツインテールを揺らしながら声を絞り出すように問い掛ける。

また別の旗袍チーバオの少女が強風に掻き消えそうなその声を拾い、足元にいるツインテールに対して答えた。

「何回聞くのバーバラ。うくん、もう少し? かな? だよねパイモン!」

「!」

「香菱シャンリンさつきからそればっかりい!」

「皆頑張れ!」

「パイモンちゃん浮かぶのずーるーい!」

半泣きで声を張るツインテールの彼女は、自由の都モンドで祈祷牧師を勤めていたバーバラ。対するのは彼女の反応を見てからからと笑う活発そうな少女・香菱と、空中をふわふわと浮かぶマスコット(兼非常食)・パイモンだ。

「でも香菱の言う通り、本当にもうすぐで山頂みたいだ」

「わ、わたくしが天の座に就くまであと少し……」

彼女等の会話に混ざるのは金髪の旅人・空ソラと不思議少女・フィツシユル。

「そんな彼等を見たパイモンは、鼓舞するように空中を駆けて頂上を指差した。」

「おう！ 慶雲頂のてっぺんまでもうひと踏ん張りだぞお前ら！」

「よーし！ グウオパーとアタシが一番乗りするからー！」

「待つんだ香菱！」

「断罪の皇女であるわたくしを差し置いて頂に登るなんて——！」

「ちよつ……行っちゃった……」

元気いっばいに先行する香菱に対し、クールな外見に反して意地っ張りな空と謎の設定を口走るフィツシユルが、彼女に追い付かんと闘志を燃やしてペースを早める。あつという間に置いていかれたバラは、呆れるように溜め息をついた。

しかしその直後、ハツとした彼女はぶるると身を強張らせると、片手を岩から離しスカート越しに内腿を擦った。

「……ひゃうつ……うう……」

—— 一見誰よりも冷静そうなその実、花も恥じらう年頃のバラはこの時、内心誰よりも激しく欲求に抗っていた。

それは、世界を巡る冒険者にとって切っても切り離せない、日常的な非常事態。

(……おトイレしたい……！)

下腹部に貯まった不要な水分が、その出口を刺激する。

彼女は括約筋と指先に一層の力を込めて、慎重に慎重に身体を引き寄せた。

「んっ……！」

力を入れた反動からか、再びぶるりと腰を震わせ淡い息を吐くバラ。上へと伸ばす腕を止め、ひくひくと緩みかけた栓を再び締め直す。

早く全て放出してしまいたい。もうどこでもいいから、皆に見えない所で……。

山頂に身を隠せるだけの草むらがある事を願い、彼女は上を見据え

た。

乙女のダム限界は近い。

◇

時は数時間ほど遡る。

冒険者組合から言い渡された任務をこなすために璃月を訪れていた一行。だが、その道中”仙人の住処に眠る聖遺物”の噂をたまたま耳にするや否や目を輝かせ、任務そっちのけでその場所を探すことになる。

浪漫を追い求めるのは冒険者（と中二病）の性。若干やる気のないバーバラを差し置いて、他三人と一匹は頭を突き合わせて真剣にその場所の検討を始めた。

「仙人が住んでいるって話だし、高い山の上だろうな」

「果てまで続く空に、降り注ぐ星々にほど近い玉座……」

「うーん、高い山なんて璃月には山程あるぞ？」

「はいはい。パイモンは洒落も上手いな」

「おーい!! オイラは真剣に言ってるんだぞ！」

日は直上へ上る頃合い。小高い丘の上で昼食の準備をする彼らは、丸焼きにする猪と香菱お手製のスープの完成を待ちつつ、石門で購入した茶を手に思考を巡らせていた。

「……そういえば香菱は璃月生まれだろ、なにか心当たりはないか？」

「ん？ そうだなあ……」

空に話を振られた香菱。一旦手に持つお玉を鍋に戻すと、顎に手を当ててコテンと首を傾げた。

「うーん……天衝山……瓊璣野の山……いや珉林のどれか……？」

「風神サマが酒場でグータラしてたんだし、意外と仙人の住処も俗っぽいところにあったりしてな！」

「無限の選択肢から、未来が掌の上で分岐している……」

『お嬢様、流石に意味が分かりませんよ』

「お、オズっ！」

「うーん、うーん……」

期待を込めて香菱を見つめる空、パイモン、霊獣オズに突っ込まれるフィツシユル。

そんな周囲の視線を集めながらも、香菱はたつぷりと時間をかけて唸る。

「……」

そんな彼等の様子を横目に、ズズと茶と啜るのはバーバラだ。

かつてモンドを襲った龍災から都市を救ってくれた空に恩を返すため、彼に着いていくことを決めたバーバラ。

空には感謝してもしたりない程だ。しかし、たまたま通りがかっただけの街のために自らの身を危険に晒すような彼の生き方は、とてもでは無いが褒められたものではなかった。おまけにモンドの秘宝も破損してしまっただし。

そのような危なっかしい空を支えるため、彼女はここにいる。バーバラは自身の本分である祈りと癒やしに専念し、パーティの意思決定は彼等に一任していた。

それはどのような場所でも付いてゆく彼女の覚悟と、どのような選択も決して道を踏み外さない彼等への信頼の表れでもあった。

「望舒旅館から見渡せば……あつバーバラ、お茶入れるね」

「ありがとう、香菱」

物思いに耽りながらも気配りを忘れず、バーバラの杯が空になるや茶を注ぐ香菱。

受け取ったバーバラは改めてそれを口に含み、ごくりと飲み込んだ。

喉を通り、丁度いい温かさが奥へと伝わってゆく。茶葉の芳醇な香りが鼻を抜け、ほうと息をついた。

彼女がモンドで飲み慣れていた紅茶とは異なるその味わいに、新鮮な気持ちとなる。

これの味の良し悪しには未だ疎いものの、石門の茶屋で休んでいた男性の”美味しい茶は後味が甘い、悪い茶は飲み込むまで岩の味”と

という言葉信じるのであれば、これは間違いなく前者であると言えよう。

「バーバラ、お茶好き？」

「うん！ 淹れてくれる香菱のお陰だよ」

「えへへ、ありがとう」

茶屋の取り扱う品物の質と、茶を淹れる香菱の腕があつてこそその口当たりの良さなのだろう。バーバラは感謝の言葉と共に、幾度も喉を潤した。

暫くして、璃月特産のスパイスの効いた昼食に舌鼓を打つ一同のど真ん中から、唐突に大声が上がる。

「……あーっ！っ！ 思い出した!!」

張り上げた声の主は香菱だ。

大袈裟な身振りと表情で彼女は空達へと振り向いた。

「どうした香菱!?!」

「きやあつ!?! つコホン……その内に秘めた思いをわたくしに捧げなさい」

「むぐっ、んんっ！ んんっ……ゲホッ！ ヴオエツ!」

面喰らった彼等は手元の料理を手放しかける。パイモンが骨付き肉を喉元につつかえさせて青い顔をする脇で、目を輝かせた香菱は自信満々に言い放った。

「わかった！ 慶雲頂だよ！ ……」 仙人の住処!!」



新たな食材を漁りに璃月巡りをしていたとき、彼女はとある山の頂に浮かぶ小島と建築物を見たという。

香菱がそう話した山こそが、璃月の中でも滅多に人の立ち寄らない珉林の名峰——慶雲頂である。

空に浮く島なんて不便な所に仙人以外は住まないと、彼女の言葉を信じて珉林に辿り着いた一行は、その遥かな頂にあんぐり口を開けた



バーバラは差し置いて、えっちらおっちら登り始めた。

そして時は——バーバラの膀胱が満たされる程には経過し——今に至る。

「ついたーっ！ 一番乗り！」

「勝てなかったか……」

「フン、おめでどう食材の魔術師よ……悔しいっ」

「お前らお疲れー！」

「ふう、ふう……なんであなた達、そんなに元気なの……」

慶雲頂の頂、雲海が眼下に広がる高さにあるこの場所ではようやく落ち着けた一行。

山登りのレースに負けた空とフィッシュルが悔しがり、パイモンが笑顔で皆を労う。そんな表情の各々に僅かな達成感を混ぜたような空気が場を包んだ。

……一人焦った表情を隠せないバーバラを除いて。

(嘘……ない……！)

そう。無いのだ。

ここは岩が削られて出来た僅かな平地と低木、そして中央の謎のモニュメントだけで構成されている。

つまり、バーバラが慶雲頂の頂に望んでいた場所が無い。

それは身を隠せる空間。音を聞かれない距離。安心して呆けられる、その場限りのお手洗い——

(おトイレできる場所が無いっ……)

ぎゅ、とバーバラはふわりとしたスカート裾を握った。スカートの丈を下げるように僅かに引つ張ると、周りから見えないように白タイツ越しに両膝を擦り合わせる。

そんなバーバラの緊急事態など露知らず、香菱が一番乗りの喜びをぴよんぴよんと全身で表している。

——が、数回跳ねた所で彼女はぴしつと固まると、僅かに内股の角度を狭めた。

「あっ……ちよつと……行ってくる！」

「はっ……どっかに——」

「おしっっっ！」

問い掛けに対し焦った声を上げる彼女は、山頂のモニュメントを挟んだ反対側の僅かな茂みに大股で向かう。

何をし始めるのかと狼狽える彼等から出来るだけ離れると、香菱は旗袍チバオの下に穿く薄い生地チバオのショートパンツを掴んで引き下ろしつつしゃがみ込んだ。

健康的な柔肌が唐突に現れ空気に触れる。そうして一行の面前へ飛び出した彼女の桃のような臀部越しに、一筋の流れが放たれた。

しよろろろろ……

「はああ……」

清水のような音と共に、香菱の溜め息がこちらに届いた。

背を向ける香菱、その姿は素肌を晒した下半身すらまともに隠せないような低木越しに丸見えとなっている。

理解が追い付かず、彼女を見守る一同の目が点になった。

じよおおおおお——

香菱の水音は次第に岩に打ち付けるような激しいものとなって、足元の岩模様を伝っていく。彼女のこれまでの我慢を示すような水流が、山肌に弾かれ慶雲頂に虹を描いた。

「わわ、ごめんなさいっ」

「空！ 見ちゃだめっ！」

「ぐあっ！」

突然の事態ながら、彼女のお花摘みを見てしまったことに思わず素で謝りそつぽを向くフィッシュル。更には空の首がパイモンに捻られる鈍い音も響いた——が、その音に気付かないほどにバーバラの目は香菱に釘付けとなっていた。

「あ、アハハ、ごめんごめん！ お茶飲みすぎちゃったみたい！」

「もー、唐突に駆け出すから何事かと思っただぞ」

「コホンツ、溜め込んだ魔力の渦は開放が必要……」

「パ、パイモン！ 首、首っ！」

恥ずかしい液体を放ちつつこちらを振り向く香菱の頬は微かに火

照っている。その緩んだ表情は快感からか、それとも照れているだけか。

「……………」

バーバラはスカートの下の膝を先程より強く擦り合わせた。

彼女が何時間も抵抗し続けている欲求を解決した姿が今、眼前に広がっている。

知らぬ間に、握る手に力が籠もっていた。

ほら、香菱もやっているように、あそこでしちやえばいいじゃない。

彼女と交代で。

しちやえば。

おしっこを。

天使——いや悪魔の囁きがバーバラの脳裏を過る。瞬間、彼女のティーポットの注ぎ口が僅かに傾いた。

「はふう」

「っん……………」

ふるるっ、と香菱とバーバラの背筋が同時に震える。

しかしその内情は正反対。放出した快感と漏れ出そうな警鐘。

空達にバレないように俯き、バーバラは首を振る。

できる訳無いじゃない。

あれは、奔放な彼女だからこそできること。

ごくごく一般的な生活しかしてこなかった私にはそんな英断はできない、と心がストップをかける。

(ああでも……………気持ちよさそう……………)

一息ついてゴソゴソとチリ紙を取り出す香菱の背中を、恨みと羨望の緋い交ぜになった瞳で見つめるバーバラ。

香菱はハリのある腿まで下ろしていたショーツパンツと下着を穿き直し立ち上がると、火照った頬はそのままに一行の輪に戻る。

「ゴメンね、ようやく登ったのに水差しちやって。我慢できなくて

……………ね？ あははは

「しよががないよな。はは……………」

お転婆な彼女にも堪えたのだろう、彼女らしくもなく恥じらいを隠

すように笑っているが、それが余計に艶っぽい表情を形作っている。妙に前屈みな空を始めとして、場は生温いような空気となる。それを察知した香菱は、どうにか雰囲気をつらわすために本来の目的の話題を振った。

「……そ、そうそう。仙人の住処？　はこの更に上なんだけど……どうやって行くんだろう？」

「な、何だって!?　ここじゃないのか!？」

「上を見てみなよ、ホラ」

「げえー!?　ホントだ!」

空気を讀んだパイモンが大きさなりアクションを取る。確かに見上げれば、不思議な結晶を利用して浮かぶ小島が目に入った。

「なになに……」雲の頂点に登りたくば、三つの山に叩頭せよ。月日と輝きは、三つの光を照らす。鳳凰鷹鳥、三つの瑞獣が来す”、か”  
「三つの山に叩頭……ここらの山々の頂に何か、光るものでもあるのかしら?」

モニュメントに刻まれた碑文を空が讀む。首を傾げるフィツシユルが推理を口にするが、それはあながち間違いでもなさそうだ。

「あー！　おい皆！　琥牢山の頂上に鳳凰の像が見えるぞ！　奥蔵山にも!」

「ええ？　よく見えたね」

「へへん」

パイモンが指差した先には、ここからでは米粒程の大きさでしか見えないものの、確かに自然の造形では無い何かが光っていた。

「琥牢山、奥蔵山、あとこの慶雲頂にも鳳凰の像があって、それを弄れば上の島に行けるってことなのかな?」

「成程。とはいえあそこまで行くのは骨が折れるな……パイモン行つてきてよ」

「オイラ非力だからギミックあったら何もできないぞ!」

それじゃあ三手に別れよう、と空が支持を飛ばそうとしたところで、バーバラの普段よりしおらしい姿が彼の目に止まった。

その顔色はやや青ざめていて、何かに耐えているように伏せ気味の

視線で震えている。空の経験からして、あれは——疲労だろう。

そう見当を付けつつ、空はバーバラに優しく問いかけた。

「バーバラ、どうした？ 具合悪いのか？」

「——へっ!? な、なんでもないの！ なんでもない……から……うん」

「いや、そうは見えない。……そうだな、鳳凰の像には俺達三人で手分けして行くから、バーバラはここで休んでいてくれ」

「あ……う、うん。ありがとう」

元々はモンドで冒険とは縁遠い暮らしをしていたんだ、バーバラにこの山登りはキツかっただろう——と労りの気持ちを込めて空は彼女の肩を優しく叩く。

それに対し「ひやうつ」と妙な声を上げたバーバラの態度にクエスチョンマークを浮かべながら、バーバラ以外のパーティはそれぞれの目標へと歩み出したのだった。

「空あ、オイラも休んでいいーい？」

「何言ってるの、パイモンが3人のナビをするんだよ」

「ええー！ 一番大変じゃないか！」

## 後編

「じゃあ、バーバラ以外で鳳凰の像に向かおう。俺は奥蔵山に、フィッシュルは琥牢山に、香菱はすぐその像に」

空は金の三編みを風に揺らしながら、チームに向けて指示を飛ばす。

「謎解きの正解が分かったら、空を飛べるパイモンとオズに情報共有してもらおうから。フィッシュル、オズを借りるよ」

「永夜を切り裂く彼の翼に、世界の秘密を乗せると良いわ」

『冒険者協会で慣れた仕事ですな』

「オイラに任せとけ！」

各々意気揚々と返事をする、向かうべき山へ向けて風の翼を展開させる。助走をつけて慶雲頂から飛び出すと、そのまま気流に乗って滑空していった。

「みんな、気を付けてね」

「ああ！ バーバラもしっかり休んでて」

「ありがとう」

手を振ってパーティーメンバーを見送るバーバラ。

空が最後に飛び立つと、バーバラだけがその場に取り残された。

「ふう……っ！」

皆の姿が豆粒ほどになったところで、バーバラは振っていた手を下ろし、スカート越しに内腿をしきりにさすり始めた。

衆目から開放された反動からか、大袈裟にも思える仕草で腰をくねりくねりと揺する。

「皆どれくらいで戻るのかな……っ！ していいかな……っ！」

眉尻を下げ、アイドルとしてグレイゾーンな言葉をぼそりと呟く。

心中の欲求を構わず吐露してしまうほどに、彼女は今の状況に安心感と焦りという相反する感情を抱いていた。

今なら誰も見ていない。乙女のティーポットも満杯だ。つまり冒険者であれば、幾ら乙女といえどお外で用を足すことが認められる十分な要件を満たしている。おしっこしても許される状況である。

しかし、ここは岩山の頂上。足場が狭い。

もしバーバラが何十秒に渡る快感に浸ってすべてを放出してしまえば、やがてここへ戻ってくる。パーティメンバーは、彼女の恥ずかしい液体を必ず足元で目にする事となるだろう。

先程香菱が用を足した時にも、岩肌の溝を伝って幾らかのそれが空達の手前まで流れていた。

「おトイレしたいよ……したいけどお……!」

バーバラは自らの秘水の出口がやや下付きであることを知っている。崖際とて、しゃがんで放った熱水は足元に叩きつけられるだろう。腰を下ろして大開脚すれば……なんてのは以ての外だ。バーバラの僅かに残ったプライドがそれだけは拒否した。

たふんと溜まった下腹の水袋の栓へ、捻りを加えて引き締めるように、小刻みに身体をひねる。上下する。

脳裏で繰り返されるのは、先程の香菱の艶やかな姿。つるりとした柔肌の向こうに迸る水流。女性特有の音。安堵の吐息。

そんな記憶の中の香菱に、自分の姿を重ねてしまう。それが引き金となった。

「あーもうっ……駄目、限界!」

バーバラの天秤が”おトイレ”に傾く。

今しかない。皆が戻ってきてからでは遅い。モンドにいた頃から想像もつかないほどの逞しい思考により、彼女は排尿を決意する。

判断してからの行動は早い。せめてもの措置としてパーティメンバーの居る場所から死角となる崖際に歩を詰めると、スカートの内脇から手を入れ、白タイツとショーツを――

「意外と簡単だった〜! ただいま!」

「きゃ……ッ!! あっ……んっ!」

――瞬間、背後から届く声。

開門まであと一步まで緩んだ乙女のダムはそのままに、バーバラは驚きのあまりビクリと僅かに飛び上がる。

そのまま硬直。霧散しかけた尿道の力みを取り戻すために全身の意識を秘所に集中し、なんとか首の皮一枚で耐えきることに成功する。その間コンマ数秒。

「あれ？ バーバラどうしたの？」

ひよこつと顔を出したのは香菱だ。

ここからほど近い鳳凰像の謎解きを任された彼女は、呆気なく解決してここに帰還した。

一仕事終えた開放感から瞳を煌めかせる香菱。こちらに背を向けるバーバラに向け、素朴な疑問を投げる。

それに対しバーバラは、アイドル活動で会得した鋼鉄の笑顔を顔面に張り付け、ツインテールをふわりとたなびかせて振り返った。

「お疲れ様！ そ、その——タイツ！ タイツの寄りを直してて……！」

「そゆことね！ ねえ聞いて！ あの鳳凰の像さあ——」

◇

(したい……したいよ……っ！)

「それでね、それでね——」

「そうなんだ——」

香菱と二人で岩に腰掛け、彼女の身振り手振りを交えた会話に相槌を打つ。

うん、うんと笑顔で頷くバーバラの両の手は腿の上で組まれている。それは爪が食い込むほどに強く組みこまれ、スカートに皺が出来るほどに強く股間に押し付けられている。

香菱が話の合間に余所を向くたびに、腰を仰げ反らせ、秘所を腰掛けた岩に食い込ませる。太腿はぴっちり閉じられ、ヒールの内の足先は忙しなく動かされていた。

括約筋の疲弊が凄まじい。モンドでの長時間の礼拝に鍛えられたバーバラの膀胱も、これ程まで追い詰められたことは記憶になかった。



気を抜けば漏れる。気を抜かずともいつか決壊する。冷や汗が止まらない。いつの間にか意識は下腹部ばかりへと向けられ、香菱との会話は上の空となっていた。

そんな折。

「……バーバラさ、もしかして我慢してるよね？」

「うん、うん——へ？」

おしっこをさ、との香菱の突然な問い掛けに、バーバラの思考がストップする。

やや伏せ目になった香菱の申し訳無さそうな仕草に、バーバラは”おしっこを我慢できない自分”が見透かされていたことによりやぐ気が付いた。

「あ、えと……その……そ、そうとうか……うん……」

気付かれた。恥ずかしい。いつから？ 無数の思考が脳裏に入り乱れ、みるみる頬に血流が巡る。口をきゅっと閉じ、顔から湯気が出そうなその顔色は、さながら鍋に入れられた火スライムのようなであった。

「ご、ごめん！ そんなに恥ずかしがらなくても……。ほら、同じ女の子だし、ね？」

バーバラの見たことのないような赤面に香菱は焦る。

「限界そう？」

「う……うん……」

香菱にバレていたことから諦めがつき、バーバラは少し控えめながらも腰の揺すりを再開させる。腰掛けていることから脚も動かし、ヒールが岩をコツコツと踏み鳴らす。

「無理しなくていいんだよ。そうだ、アタシがさつきした場所できちやいなよ！ 恥ずかしいならアタシがまたおしっこした事にするから！」

香菱は僅かな草むら——先刻何も隠せないままに彼女の欲求を開放した場所を指差した。川を作っていた逆りは岩に滲み込んだのか、もう跡しか残っていない。

「でも……」

「アタシもさつきまで辛かったから見てられないよ。誰にも言わないから！」

くるりと反対を向く香菱。バーバラを慮つての行動だが、今はその思いやりが非常に辛い。

「……ありがとう……！」

ああ、もっと早く行動しておけばよかった——そう後悔しながら、バーバラは再度意を決した。

もう本当におしっこする。香菱と同じ場所で。もう我慢しないでいいんだ。

「出る、出ちゃう……っ」

気休め程度の草むらを避け、バーバラは今度こそタイトとショーツを膝まで下げる。

そしてついに、その場にしゃがみ——

——込もうとした時、山頂に上昇気流が巻き起こる。

「わあっ!？」

「きやああっ!!？」

ごうと吹き荒れる風と共に、香菱とバーバラの絶叫も流れてゆく。バーバラのスカートは圧に負けてぶわりと浮き、中腰だった彼女のショーツのクロッチ、白磁の太腿、ぴっちりとした秘裂、薄く整った茂みの全てを白日の下に晒す。

今まさに尿道をこじ開けようとした激流は余りの驚きに引つ込んだ。バーバラは両手でスカートを押し下げ、何とか下着とストッキングを穿き直す。

バクバクと鳴る心臓を抑えていると、間もなく空達が続々と山頂に戻ってきた。

「この風に乗れば、仙人の住処」か……。皆、よくやったな」

「この程度、断罪の皇女の前には障害にすらならないわ」

「よーし、いこう！ 宝箱にはモラがいっぱい入ってるといいな！」

鳳凰の像の謎解きを終え、行きと異なり光の道を辿って慶雲頂へと

戻ったようで、集合が早い。そのまま間髪入れずに更に上へと出発となってしまう。

「バーバラ、休めたか？」

「……うん」

ジンジンする膀胱を抱えたバーバラは、空の声にか弱く応える。その声には、絶望と悲しみと若干の怨みが込められていた。



(もう駄目。漏れちゃう。ホントに——)

「うおーっ！ お宝だぁーっ！っ！」

「なんて美しい杯……！ 断罪の皇女に相応しい！」

『今更ですが、これは盗難に当たりませんか？』

「……それは言っちゃダメだ」

「これ調味料を入れるのに丁度いいかも！」

小さな浮島に建つ東屋と机、そして大きな宝箱。それが”仙人の住処”の真実であった。一行が覗き込んだ宝箱の中には、概ね噂通りの代物が詰まっております、興奮の渦が巻き起こる。

たった一人——青い顔をして震える少女を除いて。

「……っ！っ！」

バーバラは一行の後ろに離れて立ち、両手をスカート越しに秘所へと添えている。

彼女の精神はもう憔悴しきっていた。

もはや一刻の猶予もない。一步も踏み出せない。膀胱が痛い。お股を揉んでないと出ちゃう。もう我慢しなくていいかな——。

びく、びくと不意に腰を落とす仕草は、尿意の波と括約筋の限界が頻繁に訪れていることを言外に訴えていた。

……とその時、彼女に天啓が降りる。それは追い詰められた精神にとって、これしかないと思えるほどの閃きであった。

「……ふ……っ！」

意を決したバーバラ。片手は陰部を抑えたまま、もう片方の手をスカートの下に潜り込ませる。

一挙一投足が膀胱の出口を叩く。

くねりと捻った腰、腿はそのままに、ゆつくりとショーツとタイツに手を掛け、下げる。先程のように膝までは行かず、腿の中ほどで手を止めた。バーバラの恥ずかしい割れ目、普段は肌触りのいいショーツとタイツに守られている大事な場所が、再び外界の空気に触れる。そして、彼女は氣力を振り絞って神の目に力を込めた。

服に提げられた神の目が光を帯びる。青色に輝くそれは、大気に満ちた水元素を収束させて真水の球を中空に作り出す。その場所は——スカートの下。

それを彼女の割れ目に押し付け、水中に放尿する。……それがバーバラが閃いた方法であった。

これなら音もしない。最中の恥ずかしい姿も、もつと恥ずかしい液体すらも見られない。終わったら、皆が余所を向いてるときにスカートの下から崖に捨ててしまえばいい。

なんて完璧。なんて完全犯罪。これも風神様からのお恵み——と救われた感情も、排尿欲求という雑音ノイズに直ぐに掻き消された。

(おしっ……おしっ……おしっ……！)

お尻を突き出した姿勢となり、スカートの下に忍ばせた手を秘所の前から差し込む。そのまま人差し指と中指を一本の筋に対し並行に添わせ、柔い陰唇を左右へと押し開いた。

露わになるのはピンク色の肉の異なり。夜中に稀に優しく触れる乙女の蕾と、未だ誰も踏み込んでいない秘口、そして——今まさに役目を終えようとしている小さな孔。おしっこの出口。

そこへ向けて、神の目を使って慎重に水球を動かし——遂に、触れる。

ぴとっ。

「ぴゃっ」

しかし彼女は、その水球が冷たいことを失念していた。

ただでさえ敏感な箇所箇所に鋭い刺激が走り、思わず声が漏れる。

それと同時に、彼女は我慢から解き放たれた。

……じよおおおおおつ！

しゅいいいいいいいっ！

尿道から直接、水球へと我慢に我慢を重ねた激しい水流が吹き出していく。音は無く、しかし放出したおしっこが出口で激しく霧散していくような感覚。

「はあっ……くっくっ……!!」

じゅいいいいいいい——！

(はああっ……おしっこ……きもちいい……っ！)

声にならない声が肺の奥から漏れ出していく。乙女のダム of 全開の放水は、体内の全てをお股から押し流していくような気さえした。

(ふうう……っ！)

力が抜けていく。忙しく動いてた足先、力んでいたふくらはぎと腿が震えをやめ、尿道が水流に擦れる快感のみに彼女は身を委ねた。

しかし、至福の時間は長くは続かない。

「……ん？　どうかした？　バーバラ」

「ふああっ……へっ!？」

先程の「ぴやつ」というバーバラの素っ頓狂な声を聞き、パーティメンバーが一齐に振り向いたのだ。

彼等の視線が、今まさに快感を迸らせるバーバラに集中した。

(あ——)

なんとか振り向かれる直前で手をスカートから出すことに成功する。

しかし限界放尿は止まらない。

今更止められない。

一度緩んだ彼女の括約筋はその仕事を放棄してしまった。

「な、なんでもないの！　ほらっ……はあ、んっ……凄い景色だから、こわくなっちゃった、なんて……」

しゅいいいいいい——。

あれだけ冷たく感じた水球も、彼女のティーポットから溢れるおしつこと混ざり合い、段々と温くなっていく。

(お願い、見ないで……)

バーバラは眼前の仲間達にぎこちない笑顔を振りまきながら、内心で神の救いを仰ぐ。

(私に一人でおしつこさせてえ……っ！)

弛緩した表情で。

肺の中の空気を温く息づきながら。

出来れば誰にも見られない個室の中で、おしつこをさせてほしい。

しかし現実には、バーバラのささやかな願いの尽くに不認可の印を押していく。

仲間達の目の前で。

誤解を解くために言葉を発する必要がある。

ティワットの雄大な景色全てを見渡せる天空の小島で——彼女は水の球へと、乙女の熱水を放出していた。

間を置かず、香菱が再び宝箱の中身を持ちながらメンバーに話しかけた。

「……あ、この聖遺物はフィッシュルに良いかも！ ねえ見て！」

「ん？ ああ、確かに」

「わたくしに？」

彼女はバーバラにウィンクしてから話題を移す。

(しゃ、香菱……！)

バーバラは香菱の優しさに内心感涙しながら、再び脱力する。

そうこうしているうちに、乙女のティーポットの中身は大部分が放出されていた。

しゅいい……しゅいつ……しゅいつ。

ぶるりっ。

「んっ、ふうあっ……」

きゅっ、きゅつと緩みきつたおしつこの出口を数度締め、腰から背筋を走る震えに身を任せる。

(気持ちよかったあ……)

おしつこできたときの開放感。尿道を激しく擦る水流。快感に浸る自分を見つめる皆からの視線。自分はアイドルなのに、もう子供じゃないのに我慢ならずもじもじとってしまった自分への敗北感。

(クセになりそう、かも)

色々な感情が緋い交ぜになる。そんな中でも、バーバラはなぜか心の奥底から湧き上がる高揚感を知覚していた。

そんなアブノーマルな感情を抱きながら、バーバラは大きく膨れた水球を崖下にこつそりと投げ捨て、一行の輪に混ざっていった。

その後、慶雲頂から麓に降りてすぐに戦闘に入った水スライムの一匹が、奇妙な色合いと香りを発しており、皆が首を傾げる中バーバラだけは普段見せないような力(物理ダメージ)を発揮し、それを速やかに撃滅したという。

おしまい。